

景観の保全状況が地域愛着に与える影響分析

—愛媛県宇和島市旧津島町を対象として—

白柳 洋俊 (愛媛大学 大学院理工学研究科, shirayanagi@cee.chime-u.ac.jp)

渡邊 友泰 (愛媛大学 大学院理工学研究科, watanabe.tomoyasu.16@cee.chime-u.ac.jp)

羽鳥 剛史 (愛媛大学 社会共創学部, hatori@cee.chime-u.ac.jp)

An analysis of effect of landscape conservation on place attachment:

A case study of Tsushima area, Uwajima City, Ehime Prefecture

Hirotohi Shirayanagi (Graduate School of Science and Engineering, Ehime University)

Tomoyasu Watanabe (Graduate School of Science and Engineering, Ehime University)

Tsuyoshi Hatori (Faculty of Collaborative Regional Innovation, Ehime University)

要約

人口減少や高齢化に伴い地域の衰退が懸念される中、住民が社会資本の維持及び管理や地域組織の運営に主体的に取り組み、地域の存立を支えていくことが求められている。その実現には、住民一人ひとりが居住する地域を自分にとってかけがえのない存在だと感じる地域愛着を有することが基本的な前提となるが、地域愛着の醸成に繋がる要因について十分な研究蓄積があるとは言い難い。そこで本研究では、景観の保全状況に着目し、地域における景観の保全状況が、住民の地域愛着を醸成する効果を検討する。具体的には、第1に、歴史的景観キャラクターゼーションの手法に基づき評価した景観の保全度が高い程、住民の地域に関わる記憶の想起が促される傾向にある、第2に住民の地域に関わる記憶の想起量が多い程、地域愛着が高まる傾向にある、との2つの仮説を掲げ、同仮説を、愛媛県宇和島市旧津島町を対象とした景観の保全状況に関する調査及びアンケート調査に基づき実証的に検証した。調査の結果、景観の保全度が高い程、田園をはじめとした自然地物に関連する記憶の想起が促されること、こうした自然地物に関連する記憶の想起が多い程、地域愛着が高まること、すなわち上記仮説を支持する結果が得られた。

キーワード

景観の保全, 地域愛着, 記憶の想起, 歴史的景観キャラクターゼーション, 地域づくり活動

1. はじめに

人口減少や高齢化に伴い地域の衰退が懸念される中で、住民が地域に存在する社会資本の維持及び管理や地域組織の運営に主体的に取り組み、地域の存立を支えていくことが求められている。その実現には住民一人ひとりが居住する地域を自分にとってかけがえのない存在であると感じる地域愛着を有することが基本的な前提となり、地域愛着の多寡が地域における活動への参画に影響を及ぼすことが多くの研究で報告されてきた (Hidalgo and Hernandez, 2001)。例えば、Vaske and Kobrin (2001) は地域愛着が高い程、地域の自然資源に対して配慮行動を行うこと、谷口他 (2008) は、地域愛着が高い程、まちづくり活動への関心や参加意欲が高いこと、伊藤 (2017) は、地域愛着が高い程、地域に対して肯定的な評価をすることを報告している。

こうした地域愛着の醸成には、地域との関わり合いに関する記憶が重要な役割を果たすことが指摘されている (Twigger and Uzzell, 1996)。地域に関わる記憶は、当該地域とその地域で居住する住民の関わり合いの時間的な継続性を担保するものであり、同記憶を通じて住民と地域

との結びつきが強まるものと説明される。例えば、伊藤他 (2008) は、ワークショップ等により住民に地域資源に関する記憶の想起を促すことを通じて、地域愛着の醸成を試みるコミュニケーション施策の事例を提案及び紹介し、羽鳥他 (2015) は地域に関わる記憶の想起を促すことで愛着意識を効果的に醸成するコミュニケーション施策として、住民が想起した地域資源の記憶を地図に記載し、同地図を住人同士で回覧する「思い出マップ」づくりを提案するとともに、コミュニケーション施策の効果を定量的に検証し、その有効性を明らかにした。

しかし、これまでのところ、地域愛着の醸成を企図し、記憶の想起を活用したコミュニケーション施策は提案されているものの、その記憶がどのような街並みや景観を対象として想起されるかについては十分に検討されていない。既存研究に従えば、住民は地域と関わり合った記憶の想起により地域愛着が醸成されると思われるが、このとき、景観や街並みは、地域の環境に対して住民が関わり合いを持つことで形作られるため、これまでの住民の地域での営みを体現していると考えられる景観や街並みは、住民の地域との関わり合いにおける「記憶補助装置 (Lewicka, 2008)」であり、記憶補助装置を日常的に目にすることで、住民と地域との結びつきが一層高まることが考えられる。こうした記憶の想起を促す街並みや景観の条件が明らかになれば、地域愛着が育まれる街並み

や景観保全のあり方を検討する上での基礎的知見になると共に、その保全状況を勘案しながら、地域に関わる記憶の想起を促すコミュニケーション施策をより効果的に展開していく上での実践的知見につながるものと期待される。

以上の認識の下、本研究では、住民が日常生活を営む中で維持されてきた景観に着目し、地域における景観の保全状況が、住民の地域に関わる記憶の想起を促す役割を担うこと、またその記憶の想起が、地域愛着の醸成に働きかけることを明らかにすることを目的とする。

2. 研究仮説

上述の通り、既存研究においては、地域の記憶の想起が促される心的な仕組みやその要因について実証的に検討した研究は少ない。ただし、地域愛着に関わる研究分野において、その形成要因に関わる様々な議論が展開されてきた (Lewicka, 2011; Manzo and Perkins, 2006)。先述の通り、地域経験に関わる記憶は、自己と当該地域とが直接的に関わり合った経験の時間的な継続性を担保するものであるため、そうした自伝的記憶を通じて、住民と当該地域との結び付きが強まるものと考えられている。一方、Lewicka (2014) は、その地域の歴史に触れることを通じて当該地域に対する愛着が醸成される可能性があることを指摘している。記憶は、自伝的記憶に加えて、自己が生まれる以前に起こった出来事についても文化の伝承によって地域社会が共有する集合的記憶 (Connerton, 1989) が存在する。集合的記憶は自伝的記憶と同様に、情動反応を引き起こす出来事や当事者にとって重要な出来事であり、こうした集合的記憶は、自己が直接的にその出来事を経験していなくても伝承をはじめとした間接的な形で地域と自己を結び付ける「接着剤」的な役割を果たすと唱える。なかでも、歴史的な建造物や記念碑等の歴史遺産は、集合的記憶を住民に想起させる働きを有し、地域愛着の醸成に関与する可能性が指摘されている (Lewicka, 2008)。これは、文化財に代表される実存する歴史遺産は、住民がそれを目にし、その歴史性に触れることで集合的記憶の想起を促す補助的な役割を担い、こうした集合的記憶の想起もまた、自己と地域との結びつきを強めるためと指摘される。他方、Lynch (1976) は、人間が建造した都市は、その全てが歴史的な産物であり、あらゆる場所が住民の生活と関わりを持った何がしかの歴史性を帯び、こうした歴史性を有する建造物が地域と住民を結びつける重要な働きを担っていると唱える。この点を踏まえると、文化財として価値が認められるような歴史遺産に限らずとも、街並といった地域に長らく残る歴史性を有した人工的な地物は、住民がかつてその街並みで経験した自伝的記憶の想起とともに、文化の伝承による集合的記憶の想起に寄与する可能性が考えられるところである。さらに Lewicka (2008) は、記憶の想起を促す機能は、歴史的な建造物に見受けられることはもちろん、身の回りの歴史性を有する環境全般によっても促される可能性を指摘している。この点を踏まえると、地

域の中で長らく維持されてきた環境として、人工地物の他にも、地域住民の日常の営みの一部となっている田畑をはじめとした歴史性を有した自然的な地物も、住民に、自伝的記憶や集合的記憶の想起を促す役割を果たすものと考えられる。ここに、「景観とは人間を取り巻く環境のながめに他ならない」との中村 (1977) の定義に従えば、人工的な地物及び自然的な地物、いずれもが景観と捉えられる。こうした歴史的な人工地物及び歴史的な自然地物からなる歴史的な景観は、住民がそれを目にすることでかつて経験した自伝的記憶や、文化の伝承により知り得た集合的記憶の想起を促す契機となり得るものと考えられるとともに、より古い景観である程、そこには多くの出来事の記憶が蓄積及び共有されていると考えられ、景観が保全されている程、自伝的記憶及び集合的記憶の想起数が増えるものと思われる。

以上の議論を踏まえ、本研究では、住民の地域に関わる自伝的記憶及び集合的記憶を「地域に関わる記憶」と呼称し、景観の保全と地域に関わる記憶の想起ならびに同記憶の想起と地域愛着との関連性について、第1に地域における景観の保全度が高い程、住民の地域に関わる記憶の想起が促される傾向にある、第2に住民の地域に関わる記憶の想起量が多い程、地域愛着が高まる傾向にある、との2つの仮説を措定した。以下では、愛媛県宇和島市旧津島町を対象とし、景観の保全状況に関する調査及びアンケート調査により、本仮説の検証を行う。

3. 調査方法

本研究では、景観の保全状況を後述する歴史的景観キャラクターライゼーションに基づき定量化し、地域に関わる記憶の想起及び地域愛着をアンケート調査に基づき計測する。以上の計測データを用いて、景観の保全状況と地域に関わる記憶の想起の関連性、ならびに地域に関わる記憶の想起と地域愛着の関連性を分析する。

3.1 調査対象地域

本研究の調査対象地域は、愛媛県宇和島市旧津島町岩松地域及び北灘地域内の4地区、計45の自治会とした。各地区及び各自治会の位置を図1に示す。

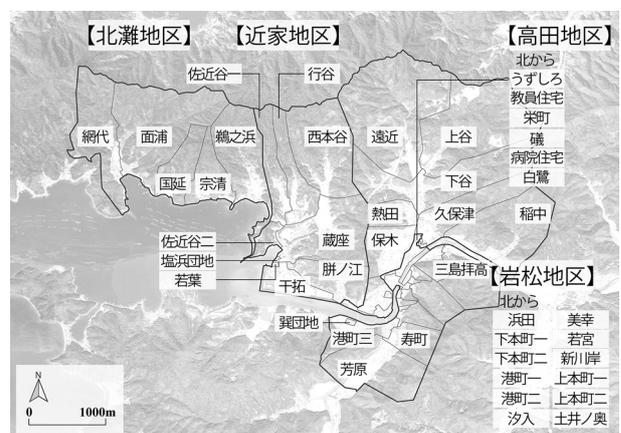


図1：調査対象地域の地区及び自治会の位置とその名称

調査対象地域は、山林や原野、河川などの自然地物が大半を占める中山間地域である。明治期に、地域を流れる岩松川を利用した舟運により、河口付近に多くの商家や蔵が軒を連ねる川湊として栄えた岩松地区、同地区の食糧庫として稲作を中心とした作物の栽培が盛んな高田地区、近年の干拓などにより主に公園や住宅地が広がる近家地区、北灘湾を囲む漁業を生業とする北灘地区からなる、多様な特色を有する自治会により構成される（愛媛県宇和島市津島町, 2005）。岩松地区は、特に若宮、新川岸、上本町一、上本町二等に江戸時代から残る酒蔵をはじめとした多くの歴史的建造物が保全され、近年ではこうした建造物を活用したまちづくりを目指し、伝統的建造物群保存対策調査が実施される（愛媛県宇和島市教育委員会, 2007）など、歴史まちづくりが積極的に展開される地区である。高田地区は、平地である磯、久保津、下谷、栄町といった昭和中期以降に整備された公共施設や新興住宅が立ち並ぶ住民の生活の中心地や、熱田、遠近、上谷など、古くから周辺地域の食料の生産を担ってきた田畑が点在する地区である。近家地区は、昭和後期に都市公園事業が行われ、キャンプ場や遊園地、日本庭園などの施設が連なる一方で、西本谷、行谷、佐近谷一などの山裾では広大な田園が広がる地区である。北灘地区は、北灘湾と背後の山林に挟まれ、その縦谷に鶴之浜、宗清、国延、面浦といった集落が点在するとの特徴を有する。

3.2 景観の保全状況に関する計測手法

一般に景観の保全状況は、古写真などにより直接的に表現する手法もしくは、古地図などを利用して間接的に表現する手法により計測される。直接的に表現する手法としては、撮影日時が特定可能な古写真と現在の状況を比較する方法が提案されている。ただし、取得可能な古写真に限られるとともに、取得した古写真の地点判断が困難であるため、過去の景観と現在の景観を比較する際にデータ作成者のバイアスが含まれる可能性がある。

間接的に表現する手法は、景観を土地利用と捉え、土地利用図に基づき過去の景観と現在の景観を比較する手法がしばしば用いられる。例えば英国文化庁は、歴史的な土地利用データに基づき土地利用が変化しない期間である「Time-depth」を算出し、景観の保全状況を定量化する「歴史的景観キャラクタライゼーション」を提案し、同手法に基づき国内の歴史的景観を評価している（Clark et al., 2014）。同手法に基づき、宮脇（2012）は、鎌倉市を対象に、土地利用を宅地、境内地、墓地、畑、水田、森林、草地に区分し、当該地域の景観の保全状況を定量化した。その結果、寺社周辺に明治期の森林が保全されていることを明らかにし、歴史的建造物にとどまらず歴史的価値を有する景観を保全する必要性を指摘した。

以上を踏まえ、本研究では、土地利用が記された歴史的な地図を基に、Time-depthを算出し、景観の保全状況の定量化を図った。具体的には、まず、2018（平成30）年のゼンリン電子住宅地図をベースマップとし、2002（平成14）年、1986（昭和61）年、1976（昭和51）年のゼン

表1：使用した地図

刊行年	地図の名称
1874（明治7）年	耕地図面 岩松町大字高田耕地図 岩松町大字近家耕地図 北灘浦之内北宇和郡耕地図
1976（昭和51）年	ゼンリン住宅地図
1986（昭和61）年	ゼンリン住宅地図
2002（平成14）年	ゼンリン住宅地図
2018（平成30）年	ゼンリン電子住宅地図

リン住宅地図、1874（明治7）年の耕地図からなる土地利用の判別が可能となる5つの地図を基に、地目として宅地、境内地、墓地、田畑、原野及び土地利用を特定できない画地を不明と設定し、各年代の土地利用及び面積を把握するための土地利用図を作成した。使用した地図を表1に示す。土地利用図の作成にあたっては、取得した地図にて土地利用の用途が記載された私有地及び公有地のみを記録し、山林や海等の土地利用が明確に記載されていない土地については記録の対象外とした。ただし、調査対象地の一部は、近年の干拓や山林開発により、新たに造成した宅地及び田畑であることが確認された。そのため、ベースマップとして採用した2018（平成30）年までの期間に干拓及び山林開発により造成された宅地及び田畑については、2002（平成14）年、1986（昭和61）年、1976（昭和51）年、1874（明治7）年の各年代の土地利用図作成において、開発される以前の状態として山林及び海を土地利用として記録した。

続いて、上記の土地利用図を基に、ベースマップとした2018（平成30）年における土地利用が変化していない期間であるTime-depthを画地ごとに算出した。分析対象とした画地は合計3489筆、総面積は585.5 haであった。

3.3 地域に関わる記憶の想起量と地域愛着の計測方法

地域愛着の測定には、実験参加者に質問項目を提示し、同項目に対する回答を要請し、定量化する手法が広く用いられる。鈴木・藤井（2008a; 2008b）は、既存研究にて知見が蓄積された場所の愛着指標を参考に、「人間と地域との感情的なつながり」を地域愛着と定義し、地域風土との接触量が増加する程、地域愛着が醸成されることを明らかにした。本研究では、鈴木・藤井（2008a; 2008b）に従い、表2に示す通り、個人的な嗜好の観点から地域に対する愛着意識を計測する3項目を設定し、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法にて回答することを要請し、3つの質問項目の算術平均から「地域愛着」尺度を構成した。なお、調査票の中で「地域」

表2：地域愛着の質問項目

地域愛着の質問項目
地域の雰囲気や土地柄が気に入っている
地域が好きである
地域にお気に入りの場所がある

とは「回答者の居住地の小・中学校程度の校区（学区）の程度の広さ」であることを明記した。

地域に関わる記憶の想起について、羽鳥他（2015）は、実験参加者に地域での思い出を思い返すことを要請し、その内容と位置を地図上に記す再生課題を課すことで地域に関わる記憶の想起を取得した。本研究においても上記を参考に、再生課題に基づき地域に関わる記憶の想起を取得した。具体的には、縮尺 800 分の 1 の地図を用紙に印字し、回答者に当該地図内での記憶を想起することを要請した。このとき、想起する記憶は最大 5 か所までとし、各記憶の内容と位置を地図内に付記するように指示した。

調査票の配布対象は、愛媛県宇和島市旧津島町岩松地域及び北灘地域に居住する 1487 世帯とし、宇和島市教育委員会の協力を得て、調査対象地域の自治会長宛に調査票を送付し、各住戸への配布を依頼した。

3.4 分析方法

本研究では、住民の地域に関わる記憶の想起量を式 (1) (2) にてモデル化し、Time-depth が地域に関わる記憶の想起量に与える影響を明らかにする。このとき、景観の認識は一定程度の画地のまとまりとして認識されるところを考慮するため、Time-depth を一定程度のまとまりとして算出する。具体的には、地域活動やコミュニティ活動における活動の単位であり、その大きさがおよそ小中学校の学区程度の範囲である自治会を一定程度のまとまりを有する範囲と捉え、各自治会の Time-depth を算出する (式 (2))。地域に関わる記憶の想起は、建造物をはじめとした人工地物に関する記憶の想起と河川や田畑など自然地物に関する記憶の想起に区分し、それぞれ分析する。

$$m_i = \alpha_0 + \alpha_1 T_{ij} \quad (1)$$

$$T_{ij} = \frac{\sum_{k \in j} (t_k \times s_k)}{\sum_{k \in j} (s_k)} \quad (2)$$

ただし、

m_i : 住民 i の地域に関わる記憶の想起量 (個)

T_{ij} : 住民 i が居住する自治会 j の Time-depth (年)

t_k : 画地 k の Time-depth (年)

s_k : 画地 k の面積 (ha)

α_0 : 定数項

α_1 : 未知パラメータ

住民の地域愛着は式 (3) にてモデル化し、地域に関わる記憶の想起量が地域愛着に与える影響を明らかにする。

$$a_i = \beta_0 + \beta_1 m_{1i} + \beta_2 m_{2i} \quad (3)$$

ただし、

a_i : 住民 i の地域愛着

m_{1i} : 住民 i の地域の人工地物に関する記憶の想起量 (個)

m_{2i} : 住民 i の地域の自然地物に関する記憶の想起量 (個)

β_0 : 定数項

β_1, β_2 : 未知パラメータ

4. 結果と考察

4.1 調査対象地域の Time-depth

各年代の土地利用を図 2～図 6 に、各年代の地目別の面積とその割合を表 3 に示す。1874 (明治 7) 年から 2018 (平成 30) 年まで田畑の面積が減少し、宅地の面積が増加していることが伺える。具体的には、1874 (明治 7) 年は、田畑の割合が 67.7 % と高く、宅地の割合は僅か 4.8 % であった。宅地の大半は川湊である岩松地区に集



図 2 : 1874 (明治 7) 年の土地利用図

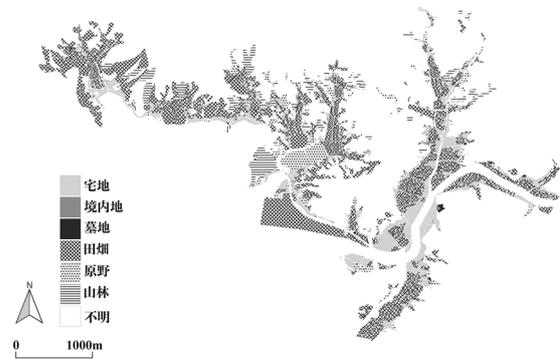


図 3 : 1976 (昭和 51) 年の土地利用図

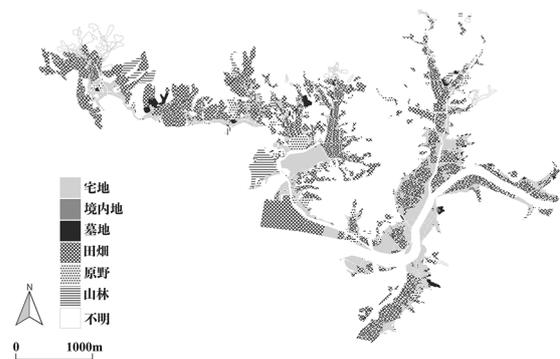


図 4 : 1986 (昭和 61) 年の土地利用図



図 5 : 2002 (平成 14 年) の土地利用図



図 6 : 2018 (平成 30 年) の土地利用図

積し、この他の宅地は山裾に点在している程度であった。その後、国道 56 号線の建設に伴い国道沿いの田畑が宅地へと転用された結果、宅地の割合が 1976 (昭和 51) 年には 17.4 %、1986 (昭和 61) 年には 22.2 % まで急増した。田畑の割合は、1976 (昭和 51) 年では 64.1 %、1986 (昭和 61) 年では 61.4 % と、その変化は少ないが、これは近家地区で実施された干拓事業により田畑の面積が増加したためである。2018 (平成 30) 年に、近家地区の田畑が宅地へと転用されると、宅地の割合は 23.7% を占めるまでとなった。

図 7 に画地毎に算出した Time-depth、図 8 に自治会毎に算出した Time-depth を示す。画地毎の Time-depth と自治会毎の Time-depth は概ね一致していることが伺える。これは調査対象地域内の土地利用の変化は概ね国道の建設に伴う沿道の土地や大規模な開発による田畑から宅地への変化であり、国道沿線や干拓地などある程度まとまった土地が開発の対象となっていることが要因と考えられる。Time-depth の高い自治会は 2018 (平成 30) 年に自治会内の田畑が占める割合の多い自治会であり、田畑は他の地目と比較して土地利用の変化が少ないことが伺える。

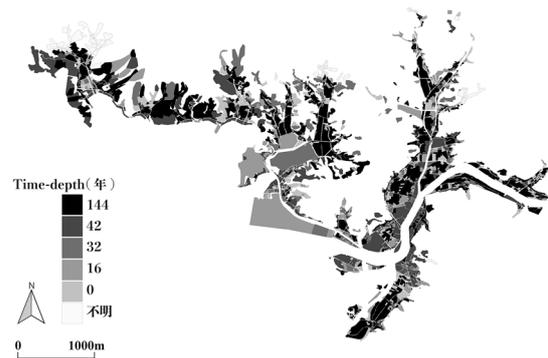


図 7 : 画地毎の Time-depth

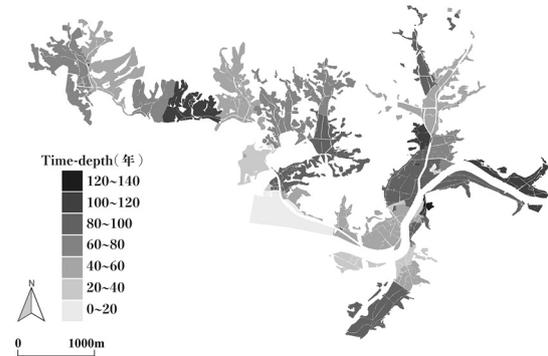


図 8 : 自治会毎の Time-depth

表 3 : 各年代の地目別の面積とその割合

項目	年代	宅地	境内地	墓地	田畑	原野	山林	海	不明	合計
面積 (ha)	1874 年	26.5	1.6	1.3	370.2	0	90.3	56.7	0	546.6
	1976 年	94.9	1.5	1.5	350.6	36.7	60.0	1.0	0.5	546.6
	1986 年	121.6	1.5	9.0	335.4	28.5	26.3	1.3	22.9	546.6
	2002 年	186.8	1.6	7.6	300.8	37.3	1.7	0	10.9	546.6
	2018 年	196.5	1.6	3.1	301.0	44.3	-	-	-	546.6
割合 (%)	1874 年	4.8	0.3	0.2	67.7	0	16.5	10.4	0	100
	1976 年	17.4	0.3	0.3	64.1	6.7	11.0	0.2	0.1	100
	1986 年	22.2	0.3	1.7	61.4	5.2	4.8	0.2	4.2	100
	2002 年	34.2	0.3	1.4	55.0	6.8	0.3	0	2.0	100
	2018 年	36.0	0.3	0.6	55.1	8.1	-	-	-	100

これに対して国道が通る河川や海岸沿い、あるいは干拓により新たに造成された大規模な平地などは、近年実施された宅地開発によって、Time-depth が低くなる傾向が観察された。ただし、歴史的な建造物を活用した歴史まちづくり活動が行われている岩松地区や寺社仏閣が現存する自治会では、Time-depth が高くなる傾向が伺える。

4.2 地域に関わる記憶の想起と地域愛着

調査票の有効回答数は303名、回収率は20.4%であった。回答者属性を表4に示す。本研究では各回答者が自身の居住する自治会内に記入した245個の記憶を地域に関わる記憶の想起量として分析を行う。同記憶のうち、人工地物に関する記憶の想起量と、自然地物に関する記憶の想起量、一人あたりの平均想起量を表5、両記憶の想起別の想起内容集計値を表6、両記憶の想起位置を図9に示す。人工地物に関する記憶の想起の一例を挙げれば、「三島神社でソフトボールをした（「遊び」として集計）」、「八幡神社でうらやすの舞を踊った（「地域行事」として集計）」などの回答を得た。自然地物に関する記憶の想起は、「岩松川で川遊びをした（「遊び」として集計）」、「田植えを手伝った（「家事」として集計）」、「岩松川の河川敷でしろお祭りに参加した（「地域行事」として集計）」などの回答を得た。記憶の想起位置は、寺社、中学校や高校、田畑や河川周辺に多く観察された。寺社では、境内で友人と遊んだ記憶に加えて、祭祀に参加した記憶などが多く観察された。田畑ではその手入れを行った記憶が、河川では、生き物を捕ったり、泳いで遊んだりした記憶や漁業を営んでいた記憶が多く布置され、自然の中での日常的な営みに関する記憶が数多く布置された。特に高田地区や岩松地区は、河川周辺の田畑に、海沿いの北灘地区は水辺周辺に記憶の想起が多く見受けられ、自然地物

表4：調査票の有効回答数と回答者の属性データ

項目	取得データ
有効回答数	303名
性別	男性183名、女性108名、不明12名
年齢	平均64.6歳（標準偏差2.0歳）
居住年数	平均31.2年（標準偏差12.9年）

表5：地域に関わる記憶の想起量

想起の種類	想起量(個)	平均値(個)	標準偏差(個)
人工地物の想起	64	0.21	0.50
自然地物の想起	181	0.60	1.08
合計	245	0.78	1.27

表6：地域に関わる記憶の想起内容

想起の種類	遊び(個)	家事(個)	地域行事(個)	学校行事(個)	散策(個)	災害(個)	その他(個)	合計(個)
人工地物の想起	26	6	13	10	0	0	9	64
自然地物の想起	91	45	19	2	4	3	17	181
小計	117	51	32	12	4	3	26	245

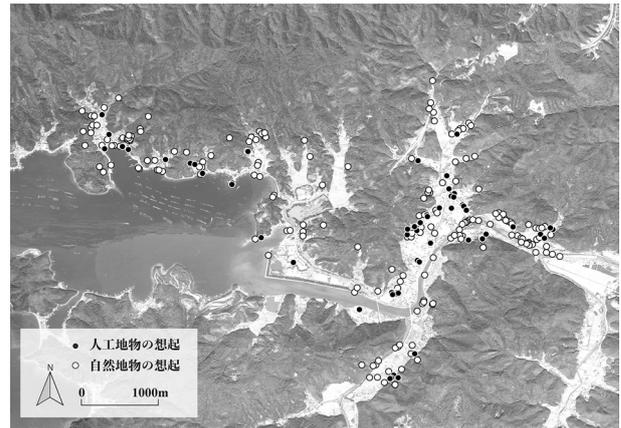


図9：地域に関わる記憶の想起位置

と日常的に触れ合っていた記憶が多く想起されている傾向にあることが伺える。

次に、地域愛着に関する質問項目に対する回答の一貫性を検討するため、クロンバック α 係数を算出した結果を表7に示す。クロンバック α 係数は0.8を上回っており、十分な信頼性が認められたため、本研究では3つの質問項目の算術平均を算出し、同値を地域愛着とした。

表7：地域愛着の集計結果

質問項目	平均値	標準偏差
地域の雰囲気や土地柄が気に入っている	3.81	0.88
地域が好きである	3.91	0.86
地域にお気に入りの場所がある	3.56	0.99
地域愛着	3.76	0.92
クロンバック α 係数：0.82		

4.3 Time-depth が記憶の想起量に与える影響分析

得られたデータを基に式(1)(2)に示したモデルを用いてパラメータ推定を行った。分析結果を表8に示す。Time-depthのパラメータは自然地物に関する記憶の想起量に有意に影響を与えることが示された。パラメータ符号は正であり、これはTime-depthが高い程、自然地物に関する記憶の想起量が増加することを表現している。ここで鈴木・藤井(2008a; 2008b)もまた歴史的資源が住民の地域への愛着意識に影響を与える可能性を指摘している。Time-depthは当該地域の景観の保全状況を意味していることを踏まえれば、地域の景観が保全されることで、同景観が古くからの記憶を宿す象徴的存在となり得るとの解釈を与えることができる。一方、Time-depthのパラメータは人工地物に関する記憶の想起量に影響を与えることが示

表 8 : Time-depth が記憶の想起量に与える影響分析

説明変数	人工地物の想起量 (個)		自然地物の想起量 (個)	
	推定値	t 値	推定値	t 値
Time-depth (年)	0.0012	1.04	0.0084	3.53**
定数項	0.13	1.52	0.0032	0.0176
観測数	303		303	
R ²	0.0035		0.040	
補正 R ²	0.0024		0.037	

注 : ** $p < .01$.

されるとの結果には至らなかった。本研究の調査対象地域の多くが田畑といった自然地物であることを踏まえると、こうした自然地物が住民の日常的な営みを反映する身近な存在として認識されることで地域に関わる記憶の想起を促す役割を担う役割を有する一方、人工地物についてはこうした役割が限定的であったものと解釈される。ただし、本研究では歴史的景観キャラクタライゼーションに基づき地図に記載される土地利用によって景観の保全状況を判断しており、そのため地図に記載されない景観上の変化を観測することはできない。したがって例えば、土地利用としての変化はないが、その土地に建設されていた建造物が建て替えられ、外見として景観が変化してしまったことは観測することができない。人工地物は自然地物と比較してこうした実際には景観の変化が生じていたものの、取得データの制約上、その変化が表現できない場合が多いことが予想され、このことが人工地物に関する記憶の想起の分析に影響を及ぼした可能性も考えられる。

4.4 記憶の想起量が地域愛着に与える影響分析

式 (3) に示したモデルを用いてパラメータ推定を行った結果を表 9 に示す。自然地物に関する記憶の想起量は地域愛着に有意に影響を与えることが示された。パラメータの符号は正であり、地域に関わる記憶の想起量が増加する程、地域愛着が高まることを表現している。これは、羽鳥他 (2015) が指摘するように、地域に関わる記憶を想起することで、自己と地域との時間的な連続性が担保され、自己と地域との間に感情的なつながりを抱いた結果、地域愛着が高まったと説明される。一方、人工地物に関する記憶の想起量は、地域愛着に有意に影響を与え

表 9 : 記憶の想起量が地域愛着に与える影響分析

説明変数	推定値	t 値
人工地物の想起量 (個)	0.033	0.361
自然地物の想起量 (個)	0.098	2.27*
定数項	3.7	68.3**
観測数	303	
R ²	0.019	
補正 R ²	0.013	

注 : ** $p < .01$, * $p < .05$.

ることが示されるとの結果には至らなかった。以上の結果は、当該地域のほとんどを占め、住民が日常的に目にし、身近な存在だと考えられる田畑をはじめとした自然地物の記憶が住民と地域を感情的に結びつける役割を担っている可能性を示している。

4.5 本研究の政策的含意

本研究の結果を踏まえると、自然地物に関連する記憶の想起を促すことで、地域愛着が高まることが期待される。例えば既存研究 (羽鳥他, 2015) で提案されているように、自らが生活する地域に関わる記憶の想起を意図的に促すコミュニケーション施策などを通じて、中山間地域において地域の大半を占めるとともに、地域を特徴づけていると考えられる田畑などの記憶の想起を促すことで地域愛着を高め得ることが期待される。

また、こうした地域に関わる記憶の想起は、景観の保全状況と関連性を有していることが示された。既存研究では、歴史的価値の高い歴史遺産によって住民が、地域の歴史の重要性を認識し、地域愛着の醸成に繋がることが指摘されてきたが (Lynch, 1976; Lewicka, 2008)、こうした知見に対して本研究の結果は、日常的に接する身の回りの歴史的な景観もまた、記憶の想起を促し、地域愛着の醸成に繋がる可能性を示すものである。これは半ば当然のように目にする自宅周辺の景観が、無意図的に地域に関わる記憶の想起を促す可能性を示唆しており、従来のコミュニケーション施策などを活用した方策と併用することで、より効果的に地域愛着を醸成し得ると考えられる。とりわけ、我が国の中山間地域は、歴史的な人工地物の残存は少ないものの、自然地物は比較的豊富に残っている地域もあり、したがって有形文化財などに指定されている歴史的な建造物が少ない自治体においても現存する古くから維持される田畑などを地域の歴史的資源と認識し、保全することを通じて、住民が主体的に関わる地域づくりを展開し得る可能性があると言えよう。

5. まとめ

本研究では、景観の保全状況が地域に関わる記憶の想起を促すことを介して、地域愛着が高くなるとの仮説を措定し、同仮説を検証した。その結果、景観の保全状況を示す Time-depth が高い程、地域の自然地物に関する記憶の想起量が多くなること、当該の記憶の想起量が多い程、地域愛着が高まることを明らかにした。このことは、住民が歴史的な景観に日常的に触れることで、地域に関わる記憶の想起が促される可能性があること、また同記憶の想起により過去との時間的な繋がりを抱かせ、地域愛着が醸成される可能性があることを意味していると考えられる。

本研究は、地域愛着と関連する要因について、特に景観の保全状況について基礎的検討を試みたものであり、残された課題は少なくない。第 1 に、景観の保全状況を歴史的景観キャラクタライゼーションに基づき定量化を図ったが、同手法により算出される Time-depth は、様々

な地物の残存状況を示すのみにとどまる。したがって、景観の保全状況をより正確に把握するためには、今後関連する保全活動や、各土地で営まれている行事など、住民の活動に関しても検討する必要がある。第2に、本研究では景観の保全度が高い程、地域に関わる記憶の想起が促され、その結果地域愛着が醸成されるとの仮説を検討したが、景観の保全は住民の参加なくして実現することは難しく、こうした景観の保全活動は住民の地域愛着に起因することも考えられる。今後、景観保全と地域愛着は相互に影響しあう因子である可能性を検討する必要がある。第3に、地域の記憶に関する想起あるいは地域愛着と関連する要因は、本研究で検討した要因の他にも、様々な要因が考えられる。現状の要因では全体の説明率は十分な水準に至っておらず、今後、デモグラフィック要因をはじめ多様な要因との関連について検討する必要がある。第4に、本研究では調査対象地における自伝的記憶及び集合的記憶を地域に関わる記憶として分析を行った。しかしながら、景観の保全状況が両記憶の想起を促す程度や、両記憶が地域愛着を醸成する程度に差があることも考えられ、今後この点についても検討する必要があると考える。

謝辞

本調査を実施するにあたり、宇和島市教育委員会森田浩二氏をはじめ多くの方にご協力を頂きました。また、本調査は、平成30年度宇和島市地域調査研究事業補助金の研究助成により行われました。ここに深謝の意を表します。

引用文献

- Clark, J., Darlington, J., and Fairclough, G. (2014). *Using historic landscape characterisation*. English Heritage.
- Connerton, P. (1989). *How societies remember*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- 愛媛県宇和島市教育委員会 (2007). 愛媛県宇和島市津島町伝統的建造物群保存対策調査報告.
- 愛媛県宇和島市津島町 (2005). 津島町誌 改訂版.
- 羽鳥剛史・片岡由香・牧野太亮 (2015). 住民参加型・回覧型「思い出マップ」によるシビックプライド醸成柵に関する研究—四国中央市妻鳥町「棹の森」を対象とした取り組みの事例—. 都市計画論文集, Vol. 50, No. 3, 445-450.
- Hidalgo, M. C. and Hernández, B. (2001). Place attachment: Conceptual and empirical questions. *Journal of Environmental Psychology*, Vol. 21, No. 3, 273-281.
- 伊藤香織・紫牟田伸子・シビックプライド研究会 (2008). シビックプライド—都市のコミュニケーションをデザインする—. 宣伝会議.
- 伊藤香織 (2017). 都市環境はいかにシビックプライドを高めるか—今治市を事例とした実証分析—. 都市計画論文集, Vol. 52, No. 3, 1268-1275.
- Lewicka, M. (2008). Place attachment, place identity, and place memory: Restoring the forgotten city past. *Journal of Environmental Psychology*, Vol. 28, 209-231.
- Lewicka, M. (2011). Place attachment: How far have we come in the last 40 years? *Journal of Environmental Psychology*, Vol. 31, 207-230.
- Lewicka, M. (2014). In search of roots: Memory as enabler of place attachment, In: Manzo, L. C. and Devine-Wright, P. (Eds): *Place Attachment* (pp. 49-60), New York: Routledge.
- Lynch, K. (1976). *What time is this place?* The MIT Press.
- Manzo, L. C. and Perkins, D. D. (2006). Finding common ground: The importance of place attachment to community participation and planning. *Journal of Planning Literature*, Vol. 20, 335-350.
- 宮脇勝 (2012). 歴史的景観キャラクターライゼーションに関する研究—鎌倉市中心部の寺社・道路・街区・土地利用の歴史的景観特性アセスメント—. 都市計画論文集, Vol. 47, No. 2, 206-213.
- 中村良夫 (1977). 土木工学体系 13 景観論. 彰国社.
- 鈴木春菜・藤井聡 (2008). 「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究. 土木学会論文集 D, Vol. 64, No. 2, 179-189.
- 鈴木春菜・藤井聡 (2008). 地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究. 土木計画学研究・論文集, Vol. 25, No. 2, 357-362.
- 谷口守・松中亮治・芝池綾 (2008). ソーシャル・キャピタル形成とまちづくり意識の関連. 土木計画学研究・論文集, Vol. 25, 311-318.
- Twigger, C. L. and Uzzell, D. L. (1996). Place and identity processes. *Journal of Environmental Psychology*, Vol. 16, No. 3, 205-220.
- Vaske, J. and Kobrin, K. (2001). Place attachment and environmental responsible behavior. *The Journal of Environmental Education*, Vol. 32, No. 4, 16-21.

Abstract

Regional communities can be improved through residents' voluntary contributions. The voluntary contribution of residents is based on their attachment to the region. However, there is not sufficient research on the factors that lead to the development of regional attachment. The present study highlights the role of conservation of the landscape in developing residents' attachment to the region. This study set two hypotheses: first, that the degree of conservation of the landscape, as evaluated by the historical landscape characterization method, affects the recall of residents' memories about the region, and second, that the recall of residents' memories about the region affects their attachment to the region. The hypotheses were examined based on a questionnaire survey and a survey on the conservation status of the landscape in the Tsushima area of Uwajima City, Ehime Prefecture. The results showed that the higher the time-depth, the more residents recall their memories of natural features, and the more they recall their memories, the more they become attached to the area, which supports the above hypothesis.

(受稿：2021年10月3日 受理：2021年12月23日)